

## 史跡踏査委員会

### 第四七回夏季県外史跡踏査報告

「朝鮮・渤海と平城・平安京を結ぶ表玄関としての敦賀・小浜の古代・中世をたどる：福井県（敦賀、若狭、小浜）方面」

川崎市立川崎総合科学高校 阿部 功 嗣

#### 行程

##### 第一日目（八月一八日）

小田原駅―向出山古墳群―氣比神宮―金ヶ崎城跡、金ヶ崎宮、  
金前寺―水戸天狗党浪士及び武田耕雲斎墓、松原神社―常宮  
神社―宿泊地（海のホテルひろせ）

##### 第二日目（八月一九日）

宿泊地―鳥浜貝塚―若狭三方縄文博物館―小浜市街、鯖街道資  
料館（各自昼食）―若狭歴史民俗資料館―国分寺―若狭神宮寺  
―明通寺―熊川宿―小田原駅

#### 一 敦賀の踏査

東名高速を一路西へ。敦賀ICから南下し、最初の踏査地、向出山古墳群へと向かった。講師の川村俊彦氏（敦賀市教育委員会文化振興課主任専門員）と合流し、一号墳墳頂（標高七五m）から平野を眺め、地形の形成について聞いた。弥生時代には鉄が朝鮮半島からここを経て畿内方面へ運ばれた。一号墳は五世紀後半に築造され、副葬品の鉄地金銅装目庇付兜・頸甲は大仙陵古墳のものと類似し、国内での出土は十例ほど。被葬者は畿内王権と繋がりをもつ首長ク

ラスと見て取れる。敦賀平野を前にしての川村氏の解説は渤海使へと進む。「延喜式」の「松原客館」、「扶桑略記」の「松原駅館」、推定地はいくつかに絞られるとのこと。第一には中遺跡で、IC付近に位置し九世紀の須恵器の坏・皿・灰釉・緑釉など普通の集落にはない大量の食器や上級官人用の石帯の一部が出土している。第二には氣比神宮で、白磁などが出土している他、その立地がかつてのラグーンに面しており、地中探査で大規模な船着き場遺構の存在が推定されている。第三には別宮神社付近で律令期の鎮火祭祀跡が発掘され、蛮客を迎える儀礼で疫病を防ぐ象徴的意味があった。何れも客館跡としては一長一短で、今後の調査の進展が期待されている。

敦賀からの古代東アジア交易世界へと想像をふくらませつつ氣比神宮へ。古代は松原客館を管轄し、日本海側で大和朝廷の航海神最高位とされた。三大木造鳥居に数えられる大鳥居前で遊行上人御砂持神事についてなど、織田信長の侵攻まで広大な社領を有して北陸道に強い影響力を持った歴史について聞いた。続いて南北朝や戦国時代の古戦場金ヶ崎城跡へ。手筒山から西方へ続く尾根筋を眺めると、往時に城柵木戸を設けた跡の凹状がはっきりと分かる。『今昔物語』「袴掛観音」の金前寺前には、明治一四年築で日本最古の赤レンガ造り鉄道ランプ小屋が現存する。尊良親王らを祀る金ヶ崎宮境内へと登り敦賀港を一望する。明治三八年に石油備蓄倉庫として築造された赤レンガ倉庫二棟が並ぶ。続いて倉庫の向いに今春開館した人道の港敦賀ムゼウムで「命のビザ」で六千人近くものユダヤ人をホロコーストから救い出した杉原千畝やポーランドとの交流について見学した。港を後にして水戸天狗党浪士武田耕雲斎と志士たちを祀る松原神社へ。処刑の半年後には国内情勢が大きく変わっ

ていたことの悲哀にふれて講師の川村氏とお別れした。気比の松原を車窓に眺めつつ通称「原発道路」を北上して常宮神社へ。諸説あるが、大谷吉継が慶長年間に奉納したとされる国宝朝鮮鐘を見学し、水平線へと沈む太陽を追いながら宿泊地の美浜町へと到着した。

## 二 若狭・小浜の踏査

二日目は三方五湖の久々子湖、三方湖を右手に見つつ南下し、鳥浜貝塚跡で講師の小島秀彰氏（若狭三方縄文博物館学芸員）と合流した。縄文時代古三方湖の地形や丸木舟の出土地点、様々な木製品の出土時の様子、そして昨年四艘の丸木船を検出して調査を終えたユリ遺跡について伺った。河川に挟まれた低湿地での発掘調査の困難さが目に浮かぶ。若狭三方縄文博物館へ移動し、館責任者の辻氏より館の設立趣旨についてお話しいただき、館内の出土品展示を見学しながら発掘成果について小島氏より解説していただいた。

縄文博物館を後にして若狭湾沿いに西進し、製塩遺跡が密集する田烏湾などを車窓から見つつ小浜市へ入った。市街の中心に位置する泉町にて鯖街道資料館・鯖街道起点、今春指定されたばかりの重要伝統的建物群保存地区を各自で見学した。昼食後、講師の下仲隆治氏（小浜市総合政策部世界遺産推進室文化遺産政策専門員）と合流し、福井県立若狭歴史民俗資料館で鳥浜貝塚出土一号丸木船など展示資料を見学し、国分寺へと向かった。建立時の国分寺はここから東に位置する「大興寺」に所在したと考えられている。「大興寺」は古代豪族の氏寺によくつけられた名称で、そこが旧国分寺であった例がいくつもあり、奈良時代の遺物や瓦が出土している。また現在地の国分寺境内に円墳があるのは珍しく、「上からの」仏教を受

け入れた豪族たちと地域の山の神信仰との緊密さが考えられる。平野を西流する北川を遡るにつれて古墳時代、弥生時代と古い遺跡が色濃く分布している。時代が下るにつれて港の重要性が増し、地域の首長や豪族が下流の平野部へと拠点を移して現在の東小浜や小浜市中心部の町が形成されていったことが、遺跡の分布からも証明できるとのことだった。

若狭国一宮の若狭姫神社、若狭彦神社を車窓から眺めつつ神宮寺へと到着した。あいにく雨で山門より歩くことは出来ず、発掘により参道の両脇から二五の僧坊跡が検出されていることは車窓からの解説となった。正面にしめ縄がされた本堂に上がり内陣を見学した。中心に本尊の薬師如来像、向かって左の空間に諸仏が置かれるが、右の空間は板で囲われ神域とされている。住職の話から、代々神仏習合の信仰形態を保持してきた苦労が伺えた。奈良の東大寺で「お水取り」行事が行われる際に、神宮寺では「お水送り」行事が行われる。鵜の瀬のある川上には根来という地名があり、朝鮮語の「ネゴリー（われらの故郷）」という意味との関係を説く言語学者もいるとのこと。この土地の性格について再認識する思いだった。

続いて一つ東側の谷へ移動し明通寺へ。一二五八年建立の本堂と一二七〇年建立の三重塔が国宝に指定されている。住職より檜皮葺の屋根を葺き替える工事が宮大工の人手不足で難航していることなど文化財保存の難しさについて伺い、仏像群の安置された内陣を拝観した。「京は遠ても十八里」とうたわれた若狭街道を東進し、京と若狭の結節点にあたる重要な宿場町熊川宿を最後の踏査地とした。そして琵琶湖水運で栄えた今津へ抜けて、木之本から帰途へと就いた。

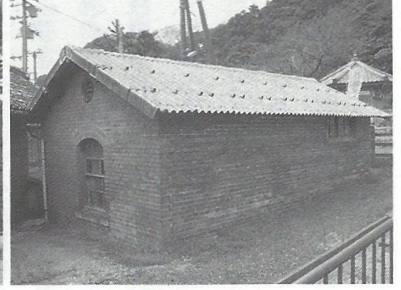




①向出山古墳 1号墳



②気比神宮大鳥居



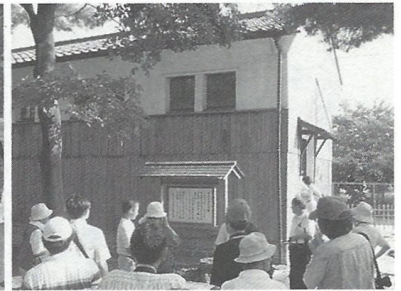
③鉄道ランプ小屋



④敦賀港赤レンガ倉庫・人道の  
港敦賀ムゼウム



⑤武田耕雲齊らの墓



⑥水戸浪士の押込められた練倉



⑦若狭三方縄文博物館  
鳥浜貝塚



⑧若狭国分寺



⑨小浜市街・鯖街道起点の標識



⑩注連縄が飾られた神宮寺本堂



⑪明通寺・国宝五重塔



⑫熊川宿・番所